

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第90巻の表紙写真を募集(テーマ:農業(水利)施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など:現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など,2021年9月30日締切)したところ,49点の応募がありました。11月1日に審査委員会(委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授)を開催し,12点を選定したので,ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では,学会誌第91巻(2023年発行)も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし,表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は,本誌会告(64ページ)をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規(東京造形大学名誉教授)

「にがい米」という古いイタリア映画(1949年製作)を見た。もう何度も見ているが見るたびに興味を引かれるところが変わっていておもしろい。時代の変化を実感できるバロメーターのような映画だ。

稲作地帯を舞台に女性の季節労働者たちの熱気を描いた内容で,映画は次の字幕から始まる。

「北イタリアの米の栽培方法は中国やインドに似ておりパピアからノバラ地方の広大な水田で稲は育つ。多くの女性が出稼ぎにやってきて40日間ほど従事する。毎年5月上旬の恒例の光景だ」

むかし見たときは,季節労働者の実態に目がいき,次に見たときには米の食文化に興味をそそられ,今度見たときには水田と用水の事情に目がいった。

イタリアの穀倉地帯は,北のミラノとトリノ,ジェノバを頂点とする三角地帯の平原である。アルプスに源流をもちアドリア海に注ぐポー川の流域,ロンバルディア平原が中心だ。ヨーロッパ最大の稲作地帯である。

そもそもなぜ稲作がイタリアで盛んなのか。米はインドを原産とするアジアのモンスーン作物だが,それがヨーロッパにもたらされたのはアラブ人の地中海進

出によるものらしい。それでまずスペインに入りそしてシチリア島,イタリア北部のポー川流域に広がったという。なぜエジプトではなくスペインなのか……。その理由はスペインで発達した灌漑設備にあった。そしてイタリアの場合も,ポー川流域に広がる湿地帯という好条件のせいだ。

ロンバルディア平原の稲作の現場は,広大で一面海のように見える。しかし映画では,仲の悪いグループの田植え作業を遅らせようと堰を壊すなどの小競り合いも描かれるから用水の事情も目に焼きつく……。

映画はその時代に生きている人々の意識を反映している。文学も美術も音楽もそうだし写真もそうだ。しかし写真には手つかずの表現という特性がある。咀嚼され加工されて表現となる方法とは別に,どんなに加工してもその素材が消えることがない。すなわち手つかずの現実が残されているのだ。どんな写真であれ,潜んだ資料性を隠すことができない。私たちはいつでもナマの資料として写真を見る,活用することができる。

くだんのイタリア映画のように,いま日本の農業にまつわるさまざまな光景をとらえた写真も,時間が経てば農業というルビのつかない光景としてさらされる。

そのおもしろさを期待しながら,今年もたくさんの写真を見せてもらった。

第90巻表紙写真入選作品

1号



世界農業遺産「能登の里山里海」を代表する棚田「白米の千枚田」

(石川県)

能登半島は文字通り半分は島だ。だからこの半島の文化の特色は「入りにくく出にくい趣をもつことにある」と60余年前の「岩波写真文庫」は言った。つまり変化を起こしにくいところだと。半島の千枚田の写真を掲げてである。戦後からまだ時間が経っていなかった時代の岩波写真文庫は、当時の日本の姿、風土、産業、生業、生活を丸ごと観察した時代誌であり地理誌である。

「千枚田のような棚田は労力ばかり多くかかり収穫は少なかった。だから人々は食うだけ作って生活費は他の稼ぎであげようとした。出稼ぎである」。それを変えたのが耕地整理や暗渠排水の工事だ、そういう中で農業改良への意欲が高まったのだと。

世界農業遺産にも指定されていまや有力な観光資源にもなっている日本の“原風景”だが、その始まりには膝までつかる湿田との格闘やずさんな気持ちの経緯もあったのだと、あらためて教えられた。美しい景観に浸った感動は時間の厚みによってもたらされているのかもしれない、とも。

「白米の千枚田」は石川県輪島市白米町にある棚田だ。昔ながらの農法も守られ日本の農業の聖地ともいわれる。種もみから苗を育てる日本古来の農法も復活させている。

棚田は北海道を除けばほぼ全国いたるところにある。福井の越前海岸、新潟の松之山、長野の小諸、富山の氷見など全国に点在する。いたるところにあるということは、そこにつくらなければならなかった険しい条件も物語る。それらをいま私たちが見飽きないのは、そこに膨大な時間が溜まっているのを感じるからだろう。

2号



大迫ダム下流側施設管理（点検設備）設置のための調査風景

(山田 昇)

大迫ダムは紀の川本川初のダムだ。型式はアーチ式コンクリートダム、高さは70.5m、治水目的をもたない多目的ダム、とある。日本有数の降雨地帯である大台ヶ原を水源とする紀の川のダムに洪水調節機能がないのは、下流の大滝ダムがその役を担っているからだ。

ダムは、上流の奈良県内では吉野川と呼ばれる紀の川水系の水を奈良盆地や紀伊平野に供給する。灌漑、生活、発電という多くの役割を担ってである。シンプルなアーチ式コンクリートダムの型式はじつに安心感を抱ける姿だと思う。海を照らす灯台同様、その姿は人を支える。

紀の川は奈良県川上村の源流から和歌山県の紀伊水道へと流れている。そして上流部では林業、中流部では農業、河口域では漁業を生みだしている。まさに第一次産業の模式図がここに見られるだろう。それは工学博士にして絵本作家でもある加古里子さんがたくさんの絵本に描いた環境をめぐる絵本の世界を想起させる。たとえば「かわ」（福音館書店）で加古さんは、「たかい やまに つもった ゆきが とけて ながれます。やまに ふった あめも ながれます。みんな あつまってきて ちいさい ながれを つくります」と話し始め、それらが山を下ってダムに流れる、そこでつくられた電気は遠くの町に送られる、さらに険しい崖の間をくぐり抜けて平野に出る。そして田や畑を潤し川は大きくなって町を抜け海に近づく、と淡々と語る。その過程を描いた絵の中には、働く人々の姿が遠くに小さく描かれていて、川がどんな様子の時にどんな仕事が必要になるのかが分かる絵本だ。

大迫ダムの姿は、流れる水の後先を想像させる。想像はやがて加古さんの絵本の世界に重なってゆく。ダムの姿は豊かな自然との共生を想像させる。

3号



みかん営農再興へ（近田昌樹）

宇和島市吉田町はみかんの産地として名高いが、2018年の〈西日本豪雨〉災害はひどかった。台風と梅雨前線による土砂崩れ被害でみかん畑を崩落させた。

写真は復旧した急斜面の栽培地と再開した営農の様子だ。斜面を補強し、急斜面の栽培地には不可欠なモノレールが再建されているのも分かる。日射しを浴びて栽培の作業にいそむる人の姿が嬉しい。山に響くモノレールの動作音も、ここでは風のような自然の音と同じように聞こえているのかもしれない。

四国山地の険しい斜面で、まるで人の気持ちをもっているかのように作業に馴染んだ様子のモノレールに出合ったことがある。近づいてきたモノレールから声をかけられ少しの間並んで歩きながら坂を上ったのだが、スピードの緩急も坂を上る私と同じでその心地に感心した。

荷台を引っ張って急斜面を上っていくモノレールの力は、レール裏に刻まれたラックから出る。モノレールの駆動輪のピンがそこにしっかり噛み合っ、余分なことは何もしないと云わんばかりの“基本主義”だ。

吉田町は水産業も盛んだが何といてもみかんで知られる。みかん王国の愛媛の中でも屈指の産地、「愛媛みかん」の産地でもある。

それにしてもみかん畑に斜面と段々畑のイメージがついて回るのはなぜかと、写真の斜面を見ながら不思議もたげた。起伏のある傾斜地が多いから、とは言うまでもないが、どうやらそれは平地が稲作栽培に優先されたことにあるようだ。米の次が野菜。嗜好性のある果樹の栽培は傾斜地にしか割り当てられなかったということだ。そしてなかでもみかんはブドウなどに比べて作業性が高い。つまり手間がかからない。そういう巡り合わせであって斜面がみかん栽培の定位置になった。しかし階段状となればだんぜん日照時間は多くなる。みかんは太陽の日射しを上からも横からもたくさん浴びて育つことになった。

みかん畑の風景には、何から何まで基本主義が貫かれている。

4号



合所ダムから望む田園風景
(渡邊圭四郎)

ジャンプ台のアプローチを下ってカンテ（踏切台）を蹴る寸前のジャンパーはこの写真と同じような景色を見ているだろう。もうすぐランディングバーンが見えてくるはず……。なぜか臨場感をかきたてる写真だ。

写真は福岡県南部のうきは市を流れる筑後川水系の隈上川に建設された多目的ダム。はじめは灌漑目的で計画された。隈上川上流域は果樹栽培が盛んなのでその大地への水だ。

しかし1978年5月から翌1979年3月まで、福岡市は大渇水に遭遇した。降水量の低下が原因だったが287日間という長期にわたって、断水や給水制限が続いたのである。この大渇水を機に、合所ダムの計画には福岡都市圏への上水道供給が目的に加えられた。多目的ダムへ変換したのだ。ダムは岩石や土砂を積み上げたロックフィルダム。合所の名はダムに沈んだ集落の地名にちなんだ。

ダム湖からアプローチのような坂を下る水流はさぞかし美しいに違いない。行く手の橋梁はうきは市から大分の日田市に至る県道106号線。辺りを空から眺めれば、水と生活、産業の関係を解くジオラマの光景が広がると想像するのもさらに楽しい。

うきは市は豊後街道の宿場町として栄えた。吉井町にはその面影が残って白壁の街並みが知られる。往時を偲ばせる筑後吉井のおひなさまをめぐる催しも盛んな町だ。

5号



龍宮堰と多自然型川づくり（近田昌樹）

いかにも自然に流れている川と見た写真は、画面をよく見るまでつくられた堰の存在に気づかなかつたからだ。堰から落ちる水音も別段何も変わらないし、それも耳を澄ませないと風の音と聴き分けられないかも、だ。

愛媛県内子町にある龍宮堰から下流区域は、スイス、ドイツで生まれた近自然河川工法による川づくりの好例だという。自然な、といった感想はそのせいかもしれない。

治水と環境の両立を図る近自然河川の考え方は、国の河川事業にも取り入れられて河川整備のポリシーとなった。国の事業では「多自然河川」というが、これは多様性の意味で近自然よりも幅広い。だがいずれにしても治水の役割、用水の用途を前提として、まず地域の歴史や文化にもとづき、河川内外のさまざまな生き物の生育環境を保全して、かつその河川らしさを守ってゆくこと、という構想である。

魚道や川の流に配慮した堰のスケールも、共に生きる哲学をこの静かな景観に教えられる。水害が頻発することから始められた改修工事だが、強い力でねじ伏せるのではなく、自然に倣って共生するというポリシーが目に見えるようだ。

小田川は、農業だけではなく豊かな森林を活用した和紙づくりにも貢献してきた。その手漉き和紙は大洲和紙の名で知られ、書道と紙、障子と紙の用途として広く普及している。川はこうした地域の営みとも共にある。

6号



先人の知恵と努力をいまでも受け継ぐ
七ヶ用水大水門
(石川県)

いまは草木に埋もれるようにしてひっそり佇んでいる施設だが、かつては大きな仕事の立役者だった。こじんまりとした石柱の門は“大水門”で、地域の稲作を支える源だった。

写真は物語の始まりを示すタイトルバックさながらで、この先を案内する雰囲気である。その先には何があるか、そして何のためか——こうした関心を誘ううまい写真だ。歴史の多くは実際にこうした施設を目にしてはじめて実感できる。保存されてあることの意義をあらためて確かめさせてくれる写真でもある。

七ヶ用水は石川県の中央に展開する手取川扇状地の水田を潤している。白山山系から流れる川は急流で山地からの礫や砂を下流に運んで堆積させた。そこに開発された水田への用水路が、七ヶ用水の始まりだ。はじめは7カ所の取入れ口からそれぞれの地域に引いていたが、洪水や氾濫への対策から一つに統合することとして大水門をつくって要とした。

写真の大水門は、当初の役目を終えている。ここから少し上流に白山頭首工ができ、そこから大水門までの水路を新たにつくったからである。しかしその姿は、果たした仕事の大きさをいかに想像させる。岩盤をくり抜いてトンネルを続けた大水門は、水流を多くの水田に運んで加賀の穀倉地帯をつくった。白山を源とする手取川は常に氾濫する暴れ川だったが、いっぽうで農業に利する豊かな扇状地を形成してゆく自然の農地造成の装置だったわけだ。その扇状地の各所に水を送る出発点がこの写真の装置だったのだ。

7号



河北潟干拓地ひまわり村（石川県）

多くの画家がひまわりを描いた。力強いゴッホのひまわり。可憐なモネのひまわり。エネルギッシュなマチスのひまわり。絢爛たるクリムトのひまわり。陰鬱なエゴン・シーレのひまわり……。生の象徴として大地に根ざすひまわりを讃えた人もいれば、枯れたひまわりに自身の心理を投影して描いた人もいる。

北アメリカが原産のひまわりはスペイン人によってヨーロッパに入り、やがてロシアにも伝えられた。そしてロシアは食用にも供するひまわり文化をつくりあげる。日本に入ってきたのは江戸時代半ば、1600年代中ごろのようだ。オランダやポルトガルとの交流を通じてのことだろう。日本に入ってきたひまわりはすぐ諸派の画家の題材になった。やはりそれほどインパクトのある花ではあったと推察できる。

写真はそのひまわりが一面に広がる、石川県の河北潟干拓地である。日本海沿岸の内灘砂丘で堰き止められてできた湖を水田にするための干拓地計画は、その後の減反政策によって畑、酪農の用途へと変更された。いまは金沢や北陸、京阪神の有力な市場を控えた栽培地として野菜、果樹の栽培および酪農が行われている。

ひまわり村は干拓地の野外ミュージアムのようなものだ。子どもたちにふるさとの水や土、そして農業への親しみを増してほしいと1995年に開村された。園児たちが5月下旬に種まきを行ったひまわりが咲きそろって7月下旬に開村する。35万本のひまわりの群生、さぞかし壮観に違いない。「ひまわり村迷路」もひまわり村のおすすめだという。ひまわりは世界のあちこちで人々の心を潤し、刺激し、思いをかき立てている。

8号



新潟平野の幾何学的な造形美

（大橋 浩）

夏井のはさ木並木は満願寺のはさ木並木とならんでよく知られた新潟の風景だ。

2つは信濃川を挟んで、日本海に近いところと阿賀野川に近いところに離れているが、言うまでもなく広い新潟平野の中にある。はさ木は越後の稲作地帯のシンボリック的存在である。

新潟から電車で新津へゆき、そこからタクシーで阿賀野川の岸辺にある北方文化博物館を目指した時があった。気がつくくと車は夏の日を少しカットする涼しい並木道を走っている。「はさ木並木か」と聞くと運転手が「停まりましょうか」と言った。返事をする間もなくタクシーは道ばたに停まった。そして「どうぞごゆっくり」と私が写真を撮る時間をくれた。どうやらそこを通る客は例外なく並木に入ると驚くが窓の外を見あげるうちに通り過ぎてしまう、だから「サービスで停まるのです」と運転手が言った。

運転手には自慢の風景らしい。私だけがその風景を誰にとってもなく自慢したい気持ちだった。

稲架と書いて「はさ」。刈り取った稲をかけて乾燥させる木組みが稲架木。新潟に特有な習慣だという。いまは機械乾燥の普及で稲架場はすっかり姿を消した。残っているはさ木並木は夏井のであれ新津からタクシーに乗って驚かされた満願寺のであれ、保存措置で残ったものだ。

ずっと残っていてほしいものだ。それは目を和ませる風景というばかりではなく、機械化以前の稲作における農民の動作を彷彿とさせる大事な歴史的信号なのである。

9号



甲佐町大井手川用水とやな場

（林田 創）

大社造に倣った屋根に千木もあるあずまや、もともとは水田用水の調節場だった。そしていまはやな場。アユの料理も食べられるという市民の憩いの場だそう。熊本県中央部の上益城郡甲佐町、市街地を貫流する緑川から取水する大井手川につくられている。

大井手用水は、今から400年ほど前に加藤清正により築造された農業用水路。清正が肥後を治めていたのは1500年代後半から1600年代初頭にかけてだが、朝鮮出兵等もあって実際に居住していた期間は短いらしい。しかしその短い間に清正は多くの河川の改修を行って灌漑用水路を整備した。干拓も進めて肥後に大穀倉地帯をつくりだした。大井手用水もその一つ。これは鵜の瀬堰により緑川から引き入れた川が、このやな場を通っているのだ。

梁漁とは、川の中に足場を組み、その上にすのこを置いた構築物を設置して、その上に魚がかかるのを待つ漁法である。

日本ではアユは古くから好まれてきた魚だ。石についた藻を食べる習性から長大な大陸の河川より日本の川に適応した魚だといわれる。そして「清流の女王」といわれている。実際、この魚は「古事記」や「万葉集」にも登場する。日本文化とのつながりも大きい魚だといえる。

写真の、空の濃い青と日を内に抱え込んで光る水面は夏の光景そのものだ。こういう水流は日本のどこでもよく見ることができるのは、それが綺麗な用水、人の力で作ってきた用水がいたるところにあるということ、用水を必要とする農作の国であったことをあらためて教えてくれる。

10号



満水を待つ (北川 孝)

滋賀県犬上郡多賀町にある灌漑用水専用のダム。ダム湖周辺は県立野鳥の森として整備されており、鳥獣保護区にも指定されている。シジュウカラ、カイツブリ、キジなど、70種を超える鳥が棲息しているようだ。

ダムのある芹川は、滋賀県東部（湖東地域）を流れる淀川水系の一級河川。鈴鹿山脈北端の霊仙山を源とし、多賀町で湖東平野に出る。そして彦根市市街地を通過して琵琶湖へ注ぐ。

芹川ダムはダムの型式の中でもっとも古典的なアースダムだ。300 mを超える堤高のヌレークダム（タジキスタン）を筆頭に世界には巨大なアースダムがたくさんあるが、日本では60 mの清願寺ダム（熊本県）が一番高い。そのほとんどが30 m以下だという。

土を盛り、締め固めてつくるダム。日本では古くから灌漑用の溜池の堰堤としてつくられてきた。現代でもおもに灌漑用のダムとして築造されているが、洪水・地震に対する安全性が低いので芹川ダムにおいても東日本大震災以降、補強工事が進められた。

アースダムのなだらかな堰堤が自然と人為の関係を見せつけている。古典的ならではの落ち着きがある。

日本のこうした古典ダムは、遣唐使として中国に渡り仏教だけでなく土木技術や医学も学んで帰った空海の先導によるものだともいわれる。石を積み土を固める技法も最先端の知見によって生み出されたのだ。

11号



安濃ダム貯水池 (長田実也)

安濃ダム湖は雨乞いの霊山でもある近くの錫杖ヶ岳にちなんで錫杖湖ともいわれる。

農耕に雨水は切り離せない。2013年においても異常渇水により安濃ダムの貯水位が大幅に低下したため、錫杖ヶ岳を望むダム湖畔で地元で伝わる龍王伝説の「雨乞い神事」を行っている。参加者は、大きな声で「雨たもれ」を3度唱え、ダムの貯水位復活を祈ったようだ。

雨乞いは世界各地にある。方法は違えど、世界中の雨乞いの儀式は神の注意を引き、喜ばせ、同情を買う目的で行われる。

イスラーム世界やエジプトには降雨祈願、モンゴルには雨乞い師、古代ローマには川に等身大の人形を投げ込む雨乞いの儀式もあったという。インド、メキシコも同じだ。

日本でも山野で火を焚いたりする雨乞いがある。神仏に芸能を奉納して懇請する雨乞いもある。禁忌を犯して神を怒らせて雨を降らせようとするものもある。

写真は貯水池内の土砂堆積状況などを調べているところだが、魚眼レンズによる光景が地球の姿の模式図を見ているような感じにさせて新鮮だ。球体の表面を覆う水面の様子も、宇宙の大空間を思わせて私たちの感想を混乱させるほどだ。あるいは、あの深海探査艇のバチスカーフを思わせる刺激だ。

そういうインパクトある写真から教えられるのは貯水池管理の重要性だ。ダム湖の管理はダム堤をはじめ、諸施設の安定的な運用にも欠かせないことだと教えられる。

12号



初冬の頃 (北川 孝)

山と池の関係がいかにも“自然”だと思う。風景絵葉書の典型は、手前に木の枝がさしかかりお目当ての風景が向こうに広がるという構図だが、三島池のこの風景も背後の伊吹山と引き立て役を譲り合いながら互いに互いを強調している趣がある。この譲り合い、というところに自然感があるのかもしれない。日本の風景はおしなべてこういう具合に“自然”である。山が屹立して他を圧倒するのではなく、川も向こう岸が見えなくなるほどに困らせることがない。

これを見ていると風景も“馴れ”てくるのではないだろうかと思えてくる。発酵して馴れてくるという意味だ。山や川とそれを見る人との間で、双方の“視線”が馴れてくるのだ。山は人の視線に馴れて人の視線も馴れて双方がうまく折り合いをつけられるようになる……、たぶん風景は人が望むように変化し人も風景を受け入れるようになっているのである。

三島池は滋賀の灌漑用貯水池である。伊吹山に源を発し琵琶湖に注ぐ姉川の伏流水を利用してつくられた。800年以上も前の1200年代につくられて現在もなお現役である。1200年代というのは源頼朝が鎌倉幕府を開いた時代、チンギス・ハンがモンゴルを統一した時代だ。歴史がそうさせるのか、人がつくった池は山を背景にした舞台の装置のように関係がつくられている。

人工の貯水池はきっと人の自然観を反映してつくられている。ダムなど農業地域につくられる多くの施設は、人々に自然の延長として据えられているだろう。どこまでが本当の自然か分からない、自然は人為との協働で創り出されてきたものだという思いも、この写真はもたらしてくれる。